
償いのゲーム

木嶋良一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

償いのゲーム

【Nコード】

N8449H

【作者名】

木嶋良一

【あらすじ】

人間は自らの発展と快楽のために地球を壊し、多くの生物を殺した、その罪は重く、我々の想像以上に残酷だ。戸崎高校2年の岩城^{リョウ}亮・清水^{マモル}守・井上理沙^{リサ}の3人はそれぞれ暗い過去を抱えながらも平凡な毎日を過ごしていたが、ある人物の出現によって、人間の罪を償うためのゲームに参加させられてしまう。

プロローグ

俺は毎日この路地を通っている。

すでに夜も更けたはずだが、いくつもの街灯が路地全体を十分に照らしている。そうやって照らされた路地にはタバコの吸い殻や空き缶、コンビニのビニール袋など数えきれないほどのゴミがいつまでも掃除されずに散乱している。

それから目をそむけて頭上を見上げて、そこに神秘的な星空などない。あるのは何本もの電線と10にも満たないほどの星が点々と散っているだけだ。

俺は星空が好きだ。別に星座とか星の名前を詳しく知っている訳ではないが、満面の星空は何よりも神秘的で、魅力的だと思う。

以前、小学生だった俺がオーストラリアに行った時に草原に寝っ転がって見上げた星空は最高だった。視野の中には到底おさまり切らないほどに広く、雲ひとつない星空はまさに自然のプラネタリウムそのものだった。

何百もの星がキラキラと輝く中、一瞬小さな赤い光が空を駆け抜けた。

「流れ星だ！　きれいだなあ…　俺初めて見たよ流れ星」

隣に寝っ転がっていたアキラが言った。アキラは小学校時代の俺の親友だ。

俺とアキラは小学校の修学旅行でオーストラリアに来ていた。

「俺も初めてだ…　スゲーきれいだったなあ　…けど、流れ星ってあんな早く消えちゃうんだな　願い事なんてデキねーじゃん」

俺は少しふてくされて言った。

「…それだけ願いをかなえるのは難しいってことだよ、きっと」
アキラは少し悲しげな表情で、悟ったようにそう言った。アキラは生れつき足が不自由でいつも右足を引きずって歩いている。一生治らないらしい。普段それを気にするような素振りは見せないが、たまにこんな表情になった。

こういうとき、俺はいつも黙ってることにしていた。

二人の間に少しでも沈黙の時間が流れたが、ひとすじの青い光線がそれをかき消した。

「また流れ星だ！ 今度は青っぱかった！ いろんな色の流れ星があるんだなあ…」

「つくそ！ 見逃した〜！」

「はははっ、それはしょうがないよ こんなに広い空だもん」

「…よし、決めたぞアキラ！ どっちが多く流れ星を見れるか勝負だ！」

「…へ？」

「いいから勝負だ！ ちゃんと数えとけよ！」

……結局この勝負は10対7で俺の負けだった。

この修学旅行の後、俺達は小学校を卒業しアキラは他の県に引っ越した。ドコの県だったかは覚えてないが、小学生の俺にはまるで別の世界に行ってしまうかのように遠く感じた。それ以来アキラとは会っていない…

「…はあ」

思わずため息がでる。俺は一体何を思っているんだ。こんな昔のことを…

もうアキラと会うことはないってのに……

プロローグ・2

ふと我にかえってみるとそこは見慣れた路地ではなかった。右側には小さな公園があり、明かりはその公園の中央に壊れかけの街灯が一つあるくらいで不気味に薄暗い。周りに家は建っているが人の気配はまったくしない。こんなところ早く離れてもとの道に戻ろうと、引き返そうとしたとき、街灯の陰に人影が見えた。街灯の近くに來るとさっきの人影がハッキリと認識できる。そこには赤いワンピースを着た女性が1人、街灯にもたれかかって立ち呆けていた。

「…おい、あんたこんなトコで何やってんだ？」

なんとなく気になって声をかけてみたが何も反応がない。声でダメなら肩に触れてみようとしてさらに近づいた時、事の重大さに気がついた。その女性のワンピースの赤色は彼女自身の血で染められていたのだ。

「あんた大丈夫か!？」

俺はあわてて女性の正面にまわり、肩をゆすりながら大声で問いかけた。しかし、反応はない。彼女の顔は傷だらけでとても正視できるものではなく、遠くからでは認識できなかったがワンピースも相当傷つき、体中から血が滴っている。

そんな中彼女の目は明らかに何かを見つめていた。俺の方を向いてはいるが、焦点がまるで俺を捉えていない。俺の頭上を通り越して更に後ろの何かを見ている、そんな感じだ。そう思った瞬間、背後にいやな気配を感じた。振り返ってはいけない、そう思いながら頭が自然に後ろを向く。次の瞬間、俺は暗闇の中にいた。

「……ウ……ろ」

なんだ？ 声が聞こえる。

「リ……ウ」

俺を呼んでんのか？ 待ってろ、今そっちに行くから。

「リヨウ！」

怒鳴んなようるせえな。

「……リヨウ！ 起きろ！」

「……ん？」

「ったく、やっと起きたか……」

あれ？ さっきまで俺は……

「ま……だ寝ぼけてんな、お前」

「……っと、ここは……？」

「学校に決まってるんだろ…… いつまで寝ぼけてんだ、もう昼休みだぜ」

「ええと…… マモル……？ 俺はいつから寝てたんだ？」

「1時限目の世界史の時からずっと！ 午前中ずっと寝っぱなしだったな」

そうだ、思い出した。昨日マンガ読んで夜更かししちゃったんで朝っからずっと寝てたんだ。ってことは… さっきのは夢？ …それにしてもリアルな夢だった。目が覚めた今でも鮮明に思い出せる。アキラのことを思い出していたことも… それにしても、一体あの血まみれの女はなんだったんだ？ 妙に頭がモヤモヤする。

「おい リョウ、起きたんなら 早くメシ食いにいこうぜ！」

俺はマモルに無理やり起こされて、引っ張られながら教室を後にした。

昼休み

俺は岩城亮^{いわしろりょう}、神奈川県にある戸崎高校^{とさきこう}の2年生だ。俺は去年の春にこっちに引越してきた。高校入学時点で既にこっちに來ていたので転校にはならなかったが、知り合いもおらず友達をつくる気にもならなかった俺は基本的に1人で行動していた。昼飯も、校舎の屋上こっそり過ごすのが日課だった。屋上からはグラウンドでドツヂボールや鬼ごっこをしているクラスメイト達を観察できたが、俺はいつもグラウンドの反対側にある小さく茂った林を観察していた。一人で学校裏の林を眺めて自然の空気を感じながら静かに昼食を食べたり、授業をさぼって昼寝したりするのが俺の日常だった。時折林から飛び立つ鳥たちや風に揺られる木々は最高に癒される光景だった：

「そろそろ居眠り卒業したらどうだ？」

箸で卵焼きを口に運びながら、呆れた表情でマモルが言った。

こいつは清水守^{しみずまもる}。1人だった俺の空間にいつの間にか入り込んでいた俺のクラスメイトだ。マモルは絵にかいたようなイケメンで、黒髪の長髪がなんとも似合っている大層なモテ男。この顔で軽音楽部のエースで名ボーカルとあっちゃモテないはずがない。そんな人気がありながら、なぜかたった1人で過ごしていた俺なんかからんでくる妙なヤツだ。

「そんなに居眠りばっかしてると、いつか単位落とされるかもしれないぞ。」

「そーかもな」

「そうかもって、お前……」

そのあともマモルは必死に居眠りを止めるよう説得してきたが、俺はさっきの夢がまだ頭から離れずともに返事をかえす気にならなかった。アキラのこと、傷ついた女性のこと、それに、最後に俺の背後に感じた不気味な存在。それらがいまだに俺の頭の中を駆け巡っていた。

「リョウ、そろそろ授業の時間だ、早く弁当食べ終えろよ。」

いつの間にか説得をあきらめていたマモルが思い出したようにそう言った。当前だ。俺はまだ2割程度しか弁当を消費していなかった。

「そうはいっても、そんなに焦って食べることもないけどな。どうせもう間に合いそうもないし。」

確かに。時計はすでに授業の2分前を通過している。

「お前、先に教室行つてろよ」

「……イヤだね」

マモルは不気味な笑顔を浮かべている。コイツは何を考えてやがる？

「何で行かねえんだよ」

「もし俺が先に教室に行ったら、お前、絶対授業サボるだろ？」

なるほど、凶星だ。俺は今、まさしくマモルを先に行かせてサボろうとたくらんでいた。

「…………さばらねえよ。」

「ははは！ 何だよ今の間は！ サボる気満々だっただろ！」

「うるせえ！ わかったよ！」

ダメだ、もうごまかせない。俺は悪態をつきながら、しぶしぶ弁当に手をつけた。

「…ったく、一回授業サボったぐらいじゃ単位なんか落とさねえつての！」

「…………まあ確かにそうだな。それじゃゆっくり食べなよ」

…あれ？意外だ。俺はてっきりまたさっきみたいに説教し始めるのかと…

” そう言ってお前は何回授業をサボってるんだよ！” とか

” そうやって油断していると足元すくわれるんだ” なんて言われるもんだと思ってた。

不思議に思った俺はマモルの表情に視線をやる。

…………驚いた。

俺の眼に映ったのはマモルの頬をつたう一粒の涙だった。

涙

マモルは泣いていた。

黙ったまま静かに涙を流している。視線の先は俺がよく観察していた学校裏の小さな林だ。

さすがにこれは気まずい、たまらずに声をかけた。

「…おい …なあおい！ マモル？」

「…ああ、悪い。何でもない。」

マモルはあわててこっちを向いてそう答えたが、少しするとまた林のほうを向きなおしてしまった。

…まあ、なにが悲しいのかってのも大方察しはつくんだが…

「マモル、お前…」

俺がそう言いかけたたん、
ドン！！ という大きな音と共に、急に俺たちの真後ろにあった扉に開いた。

「あんた達何やってんの！？ もう体育の授業始まってんのよ！！」

…ああ、また来た。 こいつは俺達のクラスメート井ノ上理沙^{リサ}だ。
まるで先生のように俺達を管理してやがる。 ……俺達と言っても、
ほとんど俺のせいだと思うが。

「リヨウ！ またサボる気だったでしょ！！ マモルまで！ リヨ
ウと一緒にサボろうなんて、一体何考えて……」
「お…おい、リサ！」

マモルはちゃんとリサの言葉を聞いていた様子だったが、まだ少しぼんやりしている。林の方に、その長い後ろ髪を引っばられているような感じだ。さすがに、今のマモルに暴言を浴びせんのは酷だと思い、そつとりサを制止した。

リサもすぐに察したらしい。怒ったような表情が一瞬で、まるでマモルを哀れむかのような表情に一転した。

「…マモル　…もしかして……」

リサとマモルは中学が同じで、リサはマモルとともに普通の会話ができる希少な女子だ。他の女子の場合は、群れてキャーキャー言うか、他の女子より仲良くなってやろうというくだらない野心を持って話しかけてくる場合がほとんどだ。マモルはそんな状況にうんざりしているらしい。そのため二人は仲がよく、俺よりもずっと長い付き合いだ。それを考えれば、リサの反応も当然だろう。

「…人間って勝手だよな。」

マモルがもう一度、林の方を見つめて言った。

「…そうだな。」

…林が今度なくなってしまうらしい。新校舎の建設のためだ。

かなり古くなった現存の校舎を捨てて、最新設備の整った校舎に乗り換えるらしい。

人間は「環境、環境」と言いながら、そうやって自然を殺してきた。

人間は自然を殺して建てた校舎で「環境破壊の醜さ」だとか「自然保護を唱える自分達の正当性」を主張する。

こうやって捨てられてきた”旧校舎”が全国にいくつあるのだろうか

か。こうやってなくなってきた木々は一体どれだけの量になるのだろうか。校舎という大きな物を平気で捨てておきながら「пой捨て禁止」なんて誰が偉そうに教えられるだろうか。なんとも皮肉で醜い話だ。

マモルの涙の訳もおおよそこんなところだろう。俺自身、気に入りの林を奪われる”怒り”は少なからずある。ただ、マモルの場合”怒り”というよりは”悲しみ”のようだった。

マモルは普段から《命》に執着する。ただ《命》と言っても、それは、自分のではなく、すべての生命に対するものだ。マモルは、虫一匹の死、一本の草の死でさえ悲しんだ。それが人間の気まぐれで殺される限り。

さすがに、蚊や蜂などの害虫を始末することには口を出さないが、人間の身勝手による殺害は徹底的に憎んでいる。

少しの間、俺達は黙った。俺達は三人とも屋上の常連であの林が好きだったのだ。

今の、林の立派な姿を目に焼き付けているような、林を眺めながら談笑したことを思い出すような、なんとなく切ない時間が流れた。

「……マモル、そろそろ授業行こ！ ほら、リヨウも！ もうお弁当は全部食べたでしょ！」

正直、まだ弁当は半分くらい残っていたが、これ以上待たせるとうるさそうなので、言われるがままに片づけて、立ち上がった。：
というより、これ以上何かを口に入れる食欲もなかった。さっきの夢をみてから妙に胸騒ぎがするのだ。

「おい。早く行こうぜ。」

「リヨウ、急げ！」

先頭に立つリサと、いつの間にか立ち直ったマモルが二人揃って俺

を急かしていた。

いいのか？

俺達3人はひとまず教室に戻った。体育着に着替えるためだ。

「ほら！ 二人とも早く着替えて！！」

既に着替え終わっていたリサがこっちを向いて大声で急かしているんだが…。

「そりゃわかったがよ、女子ならフツー向こう見るとか…しねえ？」

「嫌！ 向こう向いたら、ゆっくり着替えるでしょ、あんた達」

「そりゃそうかもしれねえけど… いいのかそれで？」

「何が悪いの！？」

「何がつて…」

コイツは…よくわからん。

「諦めときな、リヨウ。 あいつはこーいうやつだって。」

「こーいうやつって何！？」

「デリカシーがないな…ってこと」

「何それ！？ レディーに向かって！」

マモルがニヤニヤしながらおちよくって、リサが挑発に乗って騒いでいる。…こんな風景も結構見慣れた。こいつらは中学の頃からこんな仲らしい。意気投合したりケンカしたり、つくづく不思議なやつらだ。まあ、そのおかげで生まれた弊害ってのもあるんだが…

「ほら！ リヨウ急いで！」

「あとはリヨウだけだぞ!!」

……おい。 いつの間にかケンカが終わってるのはいいが…

「マモル!? おまえいつの間に着替えたんだ!? さっきまでケンカしてたじゃねえか!」

「俺はジャージの上から制服着てたからね 制服を脱ぐだけで済むんだよ」

…ズリィ。

「何モタモタしてんの? 早くしないと授業が終わっちゃう!」

急ぐのは別にいい、全く問題ないのだが… リサがこっちをガン見しているのは…当然、リサにやらしい気持などひとかけらもないんだろうが…いいのか? これで。

「早く!!」

…リサがこっちをにらみつけて言った。

独り

着替え終わった俺達は、授業をしているテニスコートに向かった。

テニスコートと言ってもグラウンドの隅に2つあるだけなので、ほとんどの生徒はコートの外でボールを打ち合ったり、壁当てをしたりしている。

俺たちはそのクラスメイト達の脇を通過して先生のもとに向かう。俺はこの瞬間が大嫌いだ。

「あいつらまた遅刻かよ。信じらんねー」

「リサもよくあんな奴らに付き合ってるよなあ」

クラスの男共はそうやって口々に批判の声を上げる。俺に気心の知れた友達がいないというのもあるが、昔からモテ男だったマモルも男子からは敬遠されている。というよりはむしろ、マモルの方から避けているような気がする。

リサによると、昔、小学校のころはマモルにもちゃんと男友達がい었지만、表向きは仲良しの顔をしている彼らも陰ではマモルに嫉妬し、自分の株を下げないようにさりげなく不満を漏らし、そんな不満が根も葉もない噂となって学校中に広がった。噂というのは常に誇張され、悪い噂はどんどん悪くなっていく。噂は何よりも強い。いや、それを簡単に信じてしまう人間が弱いのだろうか、そんな噂によってマモルは耐えがたい攻撃をうけたらしい。

もともと、誇張された噂によってちやほやされていた面もあっただけに、その苦痛は大きかっただろう。

その反動からか中学校ではグレていた期間もあったらしいが、ある時から今のような状態に落ち着いたそうだ。

大勢で群れる不良達の薄っぺらい信頼関係に嫌気がさしたんではな

いかと、俺は思っている。

…リサも、歓迎はされない。

マモルと一緒にいるだけで、女子にはひがまれ、男子からも「うざいグループ」の一員として冷たい視線を浴びせられるのだ。

リサは容姿もよく普段から陽気な性格だから、それだけにこの冷たい視線が一層痛々しく感じてられてしまう。

それでも、二人がめげたところを俺は見ることがない。だが俺は違う、この瞬間程気持ちが落ち込む瞬間はない。

——俺は独りなんだ。

この瞬間ほどそう感じることはない。

俺は臆病だ。ある時を境に人と交わることが怖くなった。怖いから、逃げた。逃げて、逃げ続けた先で二人の友人に出会うことができた。二人とも俺と同じ、孤独を知る者だった。だが実際は少し違った。独りなのは俺だけだったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8449h/>

償いのゲーム

2010年10月10日02時02分発行